

一九九一年度

文学部卒業論文目録
文学会賞授賞卒業論文要旨

愛知大學文学會

一九九一年度文学部卒業論文目録

哲 学 科

東洋哲学専修

八P四〇一 安 藤 明 子 『往生要集』から見た浄土教の

世界観

八P四〇三 井 口 覚 子 孟子の性善説について

八P四〇四 笠 間 有紀絵 韓非子——人間の現実——

八P四〇七 加 藤 裕 子 『易教』について

八P四〇九 小 山 昌 純 親鸞の如来等同思想

八P四一一 高 橋 美 保 老子の思想「道」について

八P四〇二 田 中 京 基 中国の音楽思想について——楽

記篇を中心にして——

八P四〇三 手 島 浩 司 章炳麟の思想——『五無論』（四

惑論）を中心として——

八P四〇四 中 村 隆 行 松尾芭蕉に見る老荘思想につい

て

八P四〇五 奈 良 隆 幸 孔子の幸福感——司馬遷を通し

て——

八P四〇七 原 田 加寿美 中国革命期における価値観の転

変

八P四〇九 松 岡 五 郎 日明勘合貿易にみる中国の対外

思想

八P四一一 山 西 孝 昌 『墨子』における兼愛について

五P四二三 沢 井 浩 『荀子』「性悪編」における孟

子「性善説」批判の研究

西洋哲学専修

八P四〇二 石 川 和 代 デカルトの人間観について

八P四〇三 石 塚 友 也 ハイデガーにおける「世界内存

在」について

八P四〇三 磯 村 和 寿 ベルクソンの宗教観

八P四〇七 岩 本 昌 宏 デイルタイの歴史哲学について

八P四一一 堺 穀 カントの道徳哲学について

八P四二三 田 垣 靖 スピノザにおける愛の問題につ

いて

八P四二四 恒 松 規 子 エンゲルスの自然弁証法につい

て

八P四二五 鳥 居 亨 子 プラトンの教育論

八P四二六 内 藤 貴 子 ニーチェのニヒリズムについて

八P四二七 野 崎 浩 司 バークリーの知識論について

八P四二八 古 本 雅 子 プラトンの国家論における自由

について——ロゴスの技術についての一考察——

六P四二九 堀之内 美恵子

ショーペンハウアーの意志について

六P四三〇

山村 信之

六P四三三

磯部 良子

カントの超越論的認識について

六P四三三

桂木 薫

三P四三三

田中 康広

ベルクソンにおける心身問題
ハイデガーにおける現存在の被
投性について

社会学科

社会学専修

六S五〇一

岩井 加寿美

六S五〇三

岩井 健一

六S五〇三

岩槻 泰治

学校教育と同和問題
世論操作
コンピュータ社会——ソフト
ウェア危機とその克服——

六S五〇七

加藤 祐子

六S五〇八

金野 博史

六S五〇〇

神谷 淑夫

幼年期と家族
夫婦別姓への一考察
同和地区出身者に対する結婚差
別——その社会的な一考察——

六S五〇二

小島 達也

社会的編成のメカニズムとジェ
ンダー

六S五〇三 菰田 充子

六S五〇三 近藤 悟

六S五〇五 杉浦 宏

六S五〇六 杉原 奈々

六S五〇七 須崎 深雪

六S五〇八 竹本 雅彦

六S五〇九 谷 徳子

六S五〇三 中野 洋次郎

六S五〇四 野田 浩正

六S五〇六 八木 恵美子

六S五〇六 中村 恵

六S五〇三 赤塚 亨

六S五〇五 鋤元 淳

六S五〇三 細川 禎

六S五〇三 細川 禎

六S五〇三 細川 禎

六S五〇三 細川 禎

六S五〇三 細川 禎

六S五〇三 細川 禎

六S五〇三 細川 禎

六S五〇三 細川 禎

六S五〇三 細川 禎

六S五〇三 細川 禎

六S五〇三 細川 禎

六S五〇三 細川 禎

日本人の職業観

高学歴化と教育機会の不平等

現代の少年非行における一考察

「父権」の家族社会学——現代
における父親の位置づけ——

メディア社会における大衆

職場におけるメンタルヘルス

対人コミュニケーションにおけ
る非言語コミュニケーション

サブ・カルチャーからみる現代
文化状況

現代日本のホワイトカラーに関
する考察

差別が生み出す人権問題——同
和問題における差別意識につい
て——

家族に関する制度と意識

マスコミの病理——犯罪報道に
ついて——

豊かな社会の貧困について

人口変動による地域社会の生活
構造——その人間関係、社会関
係に及ぼす影響——

六五四三七 森 千夏 日本人の「国際化」に関する一

考察

応用社会学専修

六八五〇二 安形 木理子

六八五〇三 伊串 芳恵

六八五〇四 伊藤 弘人

六八五〇五 大井 智香子

六八五〇六 市川 幸和

六八五〇七 小笹 晴代

六八五〇八 加藤 亜矢子

六八五〇九 川崎 克浩

六八五一〇 木村 可奈巳

六八五一二 古久根 昇

六八五二三 現代日本の女性労働に関する社

六八五二四 島崎 滋子

六八五二五 鈴木 一恵

六八五二六 須藤 雅晴

六八五二七 添田 貞敏

六八五二八 立川 博司

六八五二九 中島 薫

六八五三〇 那須田 佳世

六八五三一 西沢 永雄

六八五三二 西村 美香

六八五三三 服部 敦彦

六八五三四 波戸本 滋

六八五三五 堀部 智恵子

六八五三六 現代日本における余暇問題につ

六八五三七 櫻井 有美子 会学的考察
精神薄弱施設に見る地域福祉の
動向

六八五三九 現代日本の宗教——第3次宗教
ブームに関する一考察——

六八五四〇 現代教育における学校の役割
現代日本の政治的無関心——権
力構造の分析を通して——

六八五四一 定年と生活保障
日本産業社会と「学生」——「学
生」を位置付ける主体としての産
業社会——

六八五四二 「過労死」における労働問題に
ついての考察

六八五四三 女性労働に関する考察
日本における学歴社会——学習
社会に向けて——

六八五四四 情報公開制度における一考察
国際関係への新しい視角——日
豪の比較文化をとおして——

六八五四五 現代社会における余暇問題につ
いて

六八五四六 メディアと消費社会

六八五四七 堀部 智恵子

六八五四八 現代日本の女性労働に関する社

六八五四九 島崎 滋子

六八五〇〇 鈴木 一恵

六八五〇一 須藤 雅晴

六八五〇二 添田 貞敏

六八五〇三 立川 博司

六八五〇四 中島 薫

六八五〇五 那須田 佳世

六八五〇六 西沢 永雄

六八五〇七 西村 美香

六八五〇八 服部 敦彦

六八五〇九 波戸本 滋

六八五一〇 堀部 智恵子

六八五一二 現代日本の女性労働に関する社

六八五一三 島崎 滋子

六八五一四 鈴木 一恵

八S五三 山内敏樹 現代社会における青少年犯罪と

その特性

八S五三 渡辺靖直 日本的雇用の特徴とその変遷に

ついて

八S五三 和田吉史 現代社会と正常・異常

八S五三 翁孝平 日本における外国人労働者問題

八S五三 中村国子 女性のパート労働と社会的地位

八S四三 並木啓 子供の自存性

史 学 科

日本史専修

八H六〇四 井戸良子 大宝二年御野国戸籍について

——依令についての検討——

八H六〇五 今泉友美 岡部藩半原陣屋についての一考

察——高橋家文書を中心として——

て——

八H六〇六 加藤浩一 下野国小山氏について

八H六〇七 川澄敦史 東寺領尾張国大成庄について

八H六〇八 木村晃子 半済について

八H六〇九 倉橋智美 中世における紀伊国湯浅氏に

ついて

八H六〇二 櫻場章子 三河国大浜村石川家について

八H六〇三 猿橋央志 古代における八幡信仰について

八H六〇四 杉本佳代 古義堂門人について

八H六〇六 鈴木裕幸 三河国吉田医家浅井家について

八H六〇八 高橋尚子 皇嘉門院についての一考察

八H六〇九 龍 宣陽門院について

八H六〇〇 竹政寿幸 江戸時代における医師の拡がり

について——三河国宝飯郡を例

に——

八H六〇三 寺岡喜代美 東大寺領美濃国大井庄について

八H六〇三 中村佐和子 摂関家領信濃国太田庄について

八H六〇三 西島太郎 近江国における在地領主の一樣

相——鎌倉・南北朝期の朽木氏を

中心として——

八H六〇六 橋本泰治 古代の蝦夷について——多賀城

の成立時期とその性格——

八H六〇七 早川里美 蒙古襲来と在地武士

八H六〇八 伴伸二 松本亀次郎について

八H六〇九 藤本岳雄 古代の郡司制度について

八H六〇〇 増田守宏 醍醐寺領尾張国安食庄について

八H六〇三 松川敦 古代交通制度について

八H六〇三 溝口雅喜 丹波国大山荘に関する一考察

八H六〇四 箕浦さおり 三河における寺院の分布——近

世から近代へ——

八H六〇五 湯浅大司 雨乞に関する一考察——東三河

を中心——

八八六〇六 吉原 樹 古代の太宰府について

三八四三〇 河合 良之 砥石山経営に関する一考察——

三州大野村戸村家の場合——

三八四三三 角田 健 六国史の編纂についての一考察

五八四三四 島田 俊信 豊川流域の弥生文化

東洋史専修

八八六〇一 浅井 浩子 李朝鮮の国際認識

八八六〇二 浅野 史子 新嘉坡に於ける日貨排斥運動に

ついて

八八六〇三 浅見 洋子 光武帝劉秀と河北平定

八八六〇四 太田 佳美 宋代の奢侈的消費について

八八六〇五 大野 亮太郎 西安事変と抗日民族統一戦線の

形成について

八八六〇六 黒田 春樹 高麗・三別抄の反乱について

八八六〇七 小林 功貴 フィリピン革命とアギナルド

八八六〇八 志賀 多香子 オスマン・トルコ帝国のギリシ

ヤ支配について

八八六〇九 田川 真紀夫 西山党と「海賊」

八八六一〇 遠山 葉子 明末農民反乱——李自成の乱に

見る反乱の必然性——

八八六一二 中根 邦博 海上交通路の攻防から見た日露

海戦

八八六二二 中村 桂子 シンガポールにおける人民行動

党の分裂

八八六二三 中村 由紀子 第二次世界大戦期マラヤにおけ

るインド独立運動

八八六二五 菲山 博子 清代における日清銅貿易——主

として乾隆期の銅山開発をめぐっ

て——

八八六二六 坂 ひとみ 宋代の香料について——香料貿

易から見た庶民生活への浸透——

八八六二九 味知 敦子 宋代の医療——民間への医療政

策——

八八六三〇 武藤 富江 ラッフルズとイギリスのジャワ

支配——啓蒙的統治者としての

ラッフルズ——

八八六三三 吉種 誠 中国における教育の近代化と一

般民衆

八八六三三 吉田 真由美 カルティニの民族意識について

八八六三三 渡辺 真恵 清代の書院——学田制をととし

て——

三八四四二 飯田 浩志 十九世紀末イランに於けるタバ

コポイコット運動

三八四四六 河合 信一郎 東晋代、江南に於ける北方貴族

の土地所有形態について

六八四〇六 児玉

洋 漢王朝と諸侯王の関係について
——呉楚七国の乱を中心に——

六八四〇五 河辺 康弘

タイ国におけるラッタ・ニヨム運動と華僑

地理学専修

六八四〇一 生田 浩二

浜松市における土地利用の変化について——メッシュ法による

六八四〇三 伊東 文恵

豊橋市における在日韓国・朝鮮人の動向と実態

六八四〇三 大西 雄一

地方中核都市における公共交通の現況——鹿児島市電を事例にして——

六八四〇五 神谷 直彦

静岡市における七夕豪雨の影響について

六八四〇六 亀山 仁史

過疎地における公共交通の変化とその役割——山口県玖珂郡北部山間地域を事例として——

六八四〇七 川本 美由紀

豊橋市天伯原台地における地下水の水質——人間の生活活動が地下水に及ぼす影響——

六八四〇八 北原 誠司

愛知県丹羽郡に於ける桑畑の分布とその変化

六八四〇九 黒須 範知嘉

愛知県旧奥山地方における空間地域構造について

六八四一〇 慶家 直子

戦後の三里浜砂丘における商業的農業の発展

六八四一一 小林 雅行

名古屋市内における緑地と街路樹の変遷

六八四一三 細川 俊博

豊根村と東栄町の過疎化における一考察

六八四一四 佐藤 和明

小河川の生物からみた環境評価——宇利川の貝類について——

六八四一五 鈴木 晴央

刈谷市における認知距離——奥三河における村落景観の特徴とその変化——

六八四一七 橋場 理

東西言語の交錯地域における一考察

六八四一八 花井 智子

都市河川の水質汚濁

六八四一九 松本 記一

都市における中小河川の水害

六八四二〇 宮川 哲治

都市力からみた豊橋市の都市分類

六八四二二 山崎 悟

安城市における農業の現況と変化

六八四二二 伊藤 裕公

周南地域における住宅団地について

三三〇六 福岡 忠康 愛知大学下宿生における住居形態と分布について

文 学 科

国文学専修

六二七〇三 石野 佐代子 河竹默阿弥縁切り物の研究「八幡祭小望月賑」

六二七〇四 今津 昌子 森鷗外論——鷗外の時代

六二七〇五 江間 剛 石川啄木の歌

六二七〇六 大澤 正子 谷崎潤一郎の「痴人の愛」について

六二七〇七 神谷 茂樹 源氏物語の自然観

六二七〇八 葛谷 晶子 夏目漱石「こころ」論

六二七〇九 熊谷 由美子 『源氏物語』における「もの」複合語の研究

六二七一〇 佐々木 敏夫 武者小路実篤論

六二七一 佐藤 洋子 太宰治「津軽」論

六二七二 鈴木 志保 『春琴抄』について

六二七三 鈴木 玲子 太宰治「人間失格」論

六二七四 鈴木 玲子 宮沢賢治研究——「永訣の朝」から「銀河鉄道の夜」へ——

六二七五 成田 恭子 『東海道四谷怪談』における

六二七六 野田 実希子 (忠)と(家)

六二七八 野牧 敦子 樋口一葉研究——女性たちの嘆き——

六二七九 萩田 みのり 芥川龍之介「地獄変」——良秀の流した涙と死の意味について——

六二八〇 林 紀代美 『藪の中』論

六二八一 原田 良輔 源氏物語における「恥づ」「恥ぢ」「恥づかし」「恥づかしげなり」の語義研究

六二八二 日比 磨奈美 『奉教人の死』論——主題とその抒情について——

六二八三 松尾 和美 「桜の森の満開の下」論——その美について——

六二八四 水谷 公英 宮沢賢治「銀河鉄道の夜」論

六二八五 三輪 治仁 「たけくらべ」解釈——美登利の変化に即して——

六二八六 村田 典子 川端康成「雪国」論——女性描写を中心に——

六二八七 吉村 真樹 夏目漱石「三四郎」論

六二八八 古川 留視子 芥川龍之介「歯車」論

六二八九 安井 圭子 太宰治「人間失格」論

六二九〇 渡辺 佐登美 宮沢賢治「銀河鉄道の夜」論

六二九一 色 の効果——

- 六二四六三 増田 吾一 西行物語の研究
六二四六三 水谷 幸次 夏目漱石の「ハナ」論
英文学専修
六二四六一 青山 詩子 A STUDY OF "THE OLD
MAN AND THE SEA"
ON THE ORIGINS OF LAN-
GUAGE
六二四〇一 浅井 康寿 THE HISTORY OF ENGLISH
VOWELS
六二四〇三 阿部 一博 Language Mechanisms
六二四〇四 安藤 美紀 A STUDY OF ENGLISH AR-
六二四〇五 池端 宏子 TICLES
六二四〇六 石坂 ハルナ Tennessee Williams 論
六二四〇七 市川 薫 MODERN LINGUISTIC THE-
ORIES
六二四〇八 今枝 利暢 On English Infinitives
六二四〇九 鶴飼 武司 What Races Have Made Eng-
lish?
六二四一〇 尾崎 佐枝 トルーマン・カポーティ『遠い
声、遠い部屋』における自我覚
醒
六二四一一 小林 弘子 『『ワイルダーの『小さな家
シリーズ』
六二四二二 近藤 尚子 A Study on Shakespeare's *A
Midsummer Night's Dream*
六二四二三 白井 晶子 A STUDY OF A STREETCAR
NAMED DESIRE
六二四二四 杉崎 里美 Present Tense and Progres-
sive Form
六二四二五 鈴木 啓子 GULLIVER'S TRAVELS——フ
ィヌム国はぐさー——
六二四二六 鈴木 稔子 Stress, Rhythm and Intonation
in English
六二四二七 田中 ひぐみ A STUDY OF ENGLISH AND
JAPANESE EXPRESSIONS
六二四二八 都築 泰枝 A STUDY OF "The Scarlet
Letter."
六二四二九 手嶋 健 Historical Vowel Changes in
Word Pronunciations
六二四三〇 中宮 千恵美 A STUDY OF ENGLISH
ADVERBS
六二四三一 中村 祐美子 A STUDY OF THE GRAPES
OF WRATH
六二四三二 野村 修司 The Modal Verbs
六二四三三 浜崎 高宜 チャールズ・ディケンズの女性
観

- 八七二四 林 直美 The Adventures of Huckleberry Finn
 八七二六 本郷 信恵 The Syntactical Features of Old, Middle and Modern English
 八七二八 水野 彰子 Katherine Mansfield and the Burnells
 八七三〇 矢田 堅一 ディケンズ論——「大いなる遺産」に登場する人物について——
 八七三三 柳 瀬 敏 紹 The Grammerical Analysis of the English Tense
 八七三三 山本 美奈子 On *Dubliners*
 八七三三 神田 英治 There-Structures
 八七三四 奈良坂 倫子 Tennessee Williams の作品に見る自由と束縛の相克性
 八七三五 秦 香枝子 ジェイン・オースティンとフェミニズム
 八七三六 伊藤 雅子 On Oscar Wilde "The Importance of Being Earnest"
 八七三七 白井 江美 Plurals and Determiners in English
 八七三八 黒野 千鶴 ギャッビーの夢
 八七三九 鈴木 文字志 The Study of Preposition
 八七四〇 梁 鳳順 『動物農場』におけるオーウェルの官僚主義に対する洞察
 八七四一 新妻 亮 ジョン・キーツの「小夜啼鳥に寄せるうた」について
 八七四二 毛 受 靖 治 キーツの "Ode on a Grecian Urn" について
 独文学専修
 八七四三 飯田 早都子 ベルトルト・ブレヒトの戯曲
 八七四四 太田 真 司 初期トーマス・マンについて
 八七四五 葛西 博 子 テオドール・シュトルムの「白馬の騎手」について
 八七四六 神谷 奈穂子 ヘルマン・ヘッセ作『デミアン』について
 八七四七 川 尻 絹 枝 トーマス・マンの『魔の山』について
 八七四八 金 原 隆 博 『ガリレイの生涯』について
 八七四九 小久保 綾 子 『魔笛』について——文学作品として見た——
 八七五〇 斉藤 いずみ シュタイファターの『石やまぐさ』について
 八七五一 白川 美奈子 ミヒヤエル・エンデの『はてしない物語』について
 八七五二 野 本 瑞 穂 E・ケストナーの児童文学観

六八七三三 袴田美穂

ライナー・マリア・リルケ「マルテの手記」について

六八七三四 端佳子

ハイナー・ミュラー——その初期作品を中心に——

六八七三五 本多千穂

エドゥアール・フックス『風俗の歴史』について

六八七三六 村山るみ

フケー——「ウンディーネ」について——

六八七三七 横田和子

アーダルベルト・シュティフターの『晩夏』について

六八七三八 吉田菜穂子

フランツ・カフカの『変身』について

六八七三九 鷺野郁美

リルケ『形象詩集』について

六八七四〇 高嶋春佳

フランツ・カフカ『変身』について

六八七四一 小川美根子

グリムの Märchen——いくつかのメルヒェンにおける女性の姿——

仏文学専修

六八七四二 渥美恵子

ロマン・ロラン『ジャン・クリストフ』論

六八七四三 稲垣昭満

十八世紀のフランス文学——革命前夜のフランスとその文学——

六八七四三 小柳津みどり

第一次百年戦争の中世フランスへの影響について

六八七四四 柏木由香子

星の王子さま
「情熱にとりつかれた人々」

六八七四五 川崎真澄

「情熱にとりつかれた人々」

六八七四六 坂井田賢

フランス文学
「恋愛小説」としての「赤と黒」

六八七四七 柴田裕通

映画におけるフランス文学
「Piernot le fou」Jean-Luc Godard

六八七四八 下条伊都子

「アタラ」ルネの研究（シヤトーブリアンのキリスト教について）

六八七四九 竹中貴三

「アタラ」ルネの研究（シヤトーブリアンのキリスト教について）

六八七五〇 西田誠治

ジュール・ヴェルヌ「十五少年漂流記」について

六八七五一 原伸介

Les misérables——その人道主義について ジャン・ヴァルジャンとジャヴエールより——

六八七五二 菱川貴子

悪の華
ロートレアモン「マルドロールの歌」に見る20世紀文学における表現

六八七五三 村田昭吾

ラブレールのユアニスム
肉体の悪魔

六八七五四 和田友紀子

フランス革命と啓蒙思想

六八七五五 石川智子

肉体の悪魔

六八七五六 橋口尚令

フランス革命と啓蒙思想

中国文学専修

八七四〇三 伊藤智美 紫考

八七四〇三 稲石貞美 陶淵明の死生観について

八七四〇四 岩附幸代 世説新語の時代

八七四〇五 梅本朗子 則天武后

八七四〇七 小澤葉子 茅盾の思想と創作

八七四〇八 小瀬木千栄 「菜根譚」の受容

八七四〇九 糟谷直子 香妃

八七四一一 楠明子 江青について

八七四一三 熊谷亜鶴子 中国文学のなかの少数民族——「チベット」族作家扎西達娃を中

心に——

八七四一三 小島賢三 中国古代における心理学——兵

法——

八七四一四 坂口千代己 飲茶法について

八七四一五 杉山文子 巴金の『家』における三兄弟

八七四一六 鈴木美保 王安憶『小鮑莊』に見る人間の

本質

八七四一八 高田勝立 現代における兵書「孫子」

八七四一九 土岐敦子 「西遊記」をめぐる変化譚

八七四二〇 中田あゆみ 中国人にとつての海

八七四二二 野々目絵美 李清照——その詞の味わい——

八七四二三 早川浩代 張潔作『方船』から見る女性像

八七四二四 松波恵子 棄老伝説の日中比較

八七四二五 三浦直美 『入唐求法巡礼行記』にあらわ

れる人々

八七四二六 堀田裕美 筌について

プラトンの教育論

八八P四一一五 鳥居 亨 子

教育は何を目的としてなされるべきものであるか。人間がよく生きるといふ徳の問題こそが、教育の究極として求めるものである、と私は考える。私がこの問題を考える指針としてプラトンの教育についての考え方を選んだのには、理由がある。プラトンは、国家政治と教育とを不可分で切り離せないものであると考えていた。この観点、つまり教育を人間社会と深く結びつけている、という点が、現在日本で実施されている教育には欠けている。そこで、私は彼の著作が、現在の教育の進むべき進路に対して基本的な反省を促し、また適切な示唆を与えてくれるはずである、と期待したのである。

以上から分かるように私の論文では、教育を単に知的欲求の充足を主流とした知識の啓発をめざすものとして捉えてはいない。そうではなく、教育を人間形成の問題として考察している点が、本論文の特徴であると言える。

それでは、論文の具体的な内容について説明を試みたい。第一章では、実際の教育への問題提起をしている。最もオーソドックスな手段の一つと言える読書や、教師と生徒との間

での教授のあり方について、その弊害や問題点を考えることから、まずはじめている。そして、指摘した問題点を克服することが可能であると考えられる対話について、本論を進めていくことを明らかにしている。

第二章では、論理展開の原動力となるものが、愛知におけるエロスであることをまず述べている。このエロスと論理展開とが結びつくことによって、対話は成立するのである。そして更に、産婆術がエロスと論理展開とをどのように結びつけていくかを考えることによって、対話における産婆術の働きを考察している。つまり、この章では、プラトンの考える対話というものの性質を、彼の著作を通して追究している、と言える。

プラトンの対話では、様々なテーマについて吟味がなされるが、要求される結論は、常にその本質である。この本質とは、プラトンの思想の一つとしてよく知られる、イデア論にかかわる問題である。第三章では、前章で考えてきた対話の性質から、より深く探求眼を進めて、対話の底に潜む根源的

な問題にせまっている。そして、なぜ対話が可能であるか、ということについて、プラトンの想起説をもとに考えている。

以上、第二章、第三章でもって対話についての考察を終えている。プラトンの著作の範囲で、対話について考えてきたわけであるが、それ以上の難しい点、たとえばイデア論を考察するにおいて生じる普遍の問題についてなどには、考察の手を伸ばしていない。そこが私の論文の、いたらない欠点であり、今後の課題として残されている問題点である。

第四章では、教育についての私自身の考えを、かなり随意的な形式で述べて、本論文の結論としている。

教育というのは、人間が生きている限り休みなくかわり続ける最も重要な問題である。一人の人間の中に永遠の価値を持った精神を植えつけると共に、ある人間から別の人間へと植えつけられる崇高な精神の可能性を秘めている。つまり、精神と精神とのふれ合いこそが教育である、と言える。

古い昔のギリシャが、現代にもたらしてくれる知恵というのは、長い年月を経ても変わらぬ力強さと美しさを持ち続けてきたものである。それにもかかわらず、その教えは、新鮮な感覚をもって教育のあるべき姿を今の私達に解き明かしてくれているように思われる。古代に咲いていた種から再び咲く教えの花の命を、私は大切にしたい。

社会的編成のメカニズムとジェンダー

八八S五〇一 小島 達也

現代社会を考える上では様々な構成単位が取り上げられているが、その中でも性は社会の編成する重要な軸になっている。ここでは性の問題を軸として、現代社会を考えてみる。従来言われて来た様に、心的特性や、行動傾向を解剖学的根拠にもとづく、生物学的二分法の延長でとらえる事は、実際には出来ない。従って、分析上、性の生物学的側面と心理・社会・文化的側面とを区別しなくてはならないだろう。前者の区別がセックス、後者の区別がジェンダーと言うのが一般的である。

性に関する社会・文化的現象を扱う場合ジェンダーに視点を置く事がより重要になる。この様なジェンダーを考察する上での視点の置かれ方は、主に二つのものがある。一方は社会・文化の領域において構造的に実在なものであるジェンダーを考察していくものであり、他方はジェンダーが個人において内在化されていく心理的な過程について考察していくものである。前者はパーソンズら機能主義者が主にとっている立場であり、後者は主として精神分析的視点に立つものである。

る。この両者は共にジェンダーをセックスに還元する事なしに理論を展開しようとしているが、実際にこれは達成されていない。機能主義を代表するパーソンズであっても、出産・授乳の能力と言うセックスの必然から性役割分化を自明視し、またそうある事を自然なものと考えている。精神分析的視点に立ったN・チヨドロウの「母親業の再生産」の研究は、重要な成果をあげているが、性の現代社会に特有な意味を考えると言う点では不十分である。この点においてI・イリイチの提示した「ヴァナキュラー・ジェンダー論」は一つの示唆を与えてくれるものである。

(第一章)

I・イリイチは産業化以前の非物質的領域での象徴編成の在り方にジェンダーを見ているのである。彼はこのジェンダーの在り方を一般的なジェンダーの概念と区別するため、ヴァナキュラー・ジェンダーと呼んでいる。ヴァナキュラー・ジェンダーは宇宙論を基礎づける「男」と「女」のシンボルの編成であり、特定の社会の中でのみ意味をなし、社会が異なれば、同一のものではあり得ないものである。この様なヴ

アナキユラー・ジェンダーを軸とした社会に対して、現代産業社会は、経済的交換体系の無限の拡大を必然とし、欠如性

のである。

(第3章)

「希少性が、需要と手段体系との間の全ての相關関係を律している様な世界を前提としている。そしてそれを保証しているのが、「中性人間」の存在である。イリイチはこの中性人間の属するカテゴリーとしての性を経済セックスと呼んでいる。経済セックスにおいてはその機能的な意味は問題とされない。歴史的な性の意味の変化に視点を置いたイリイチは、この変化をヴァナキユラー・ジェンダーから経済セックスへの性の編成の変化と考えている。言い換えれば、これは、性が非物質的領域での編成から物質的領域での編成へと移ったと言う事である。産業化以前の社会では、全ての交換が象徴(シンボル)を通じてのものであったが、産業化の中で象徴は具体的で感性的な意味の側面を失い、経済的価値の記号(コード)となるのである。

ジェンダーをこの様なものととらえる事は従来の「経験科学としての社会学」の範囲を逸脱し、哲学や文明論の領域に近づくものとなるが、性の社会学はこの種の冒険を回避すべきではない。

(まとめ)

〔引用・参考文献〕

I・イリイチ、玉野井芳郎「ジェンダー 女と男の世界」、

一九八四年、岩波書店

山本哲士「ジェンダーと愛 男女学入門」一九九〇年、新曜社

社

山本哲士編「経済セックスとジェンダー」一九八三年、新評論

論

(第2章)

セクシズムを労働の問題からとらえた場合、それは支払われる労働と支払われない労働のあらゆる領域に存在する。産業的生産様式から見て、産業的労働は、支払われる労働と支払われない労働に分割される。支払われない労働には生産された商品やサービスを受容し消費する労働としてシャドウ・ワークが含まれる。産業社会において労働は本来ユニセックスなものであるが、シャドウ・ワークは、生産的労働優位の労働イデオロギーによって、男女に不平等に分配されている

高学歴化と教育機会の不平等

八八五〇一三 近 藤 悟

我が国における教育機会は、一般にはすべての者に平等に開かれていると考えられており、これは教育基本法の理念にも沿っている。確かに中等教育は進義務化し、高校への進学率は90%を越え、また大卒であるということに対しての世間の見方は、あたかもそれが当然であるかのようにさえ思われている。かかる現況から教育機会平等化は徹底したかのようにさえみなされている。

本論文はこれらの常識的な見解なり、判断を検討し、個人の達成学歴が社会的属性の影響をうけ、むしろ教育機会の不平等が継続し、さらに新たな不平等が生まれつつあるといういわゆる「アンダーソンのパラドックス」を明らかにしていくことを主目的とした。

研究方法としてデータ不足ではあったがSSM調査サンプルに基づき、男女別に中等教育・高等教育の進学機会、進学先学校の質的相違にみられる出身階層間格差について、旧制教育世代から新制教育世代までの趨勢を分析した。その結果、中等教育後期課程の進学機会については階層間格差の消滅が

確認されたが、高等教育における進学機会は、多少、その過程において相違があるものの、男性・女性のケースとも格差の縮小傾向はみられなかった。また、中等教育における全日制普通科と出身階層との関係には中等教育進学機会とは全く逆に、階層間格差が拡大している傾向さえみられ、教育機会の不平等の現状を確認することができた。

また、本論文は高学歴化の要因と教育機会の不平等問題の重要性を探り、その関連性を解明するために、企業社会におけるマクロな視点、及び高等教育志願率からとらえた行為選択の基準というミクロな視点から学歴の効用について検討した。しかしこの分析において学歴の多様な価値についてはあまり触れることができず、主として企業社会との関連に限定された傾向があつたことには問題が残ろう。しかし業績的地位たる学歴が社会的地位の主たる構成要素とみなされてきた現代日本社会を反映して企業社会も依然として学歴重視の傾向があり、他方で能力主義を掲げながらも大卒有利の否定できない現状のみられることを確認した。こうして高等教育の

必要性をより一層、確認したが、同時に自らの子どもの高學歷を望む親の意識の根強さを併せ考えたとき、改めて教育機会の不平等が社会問題として問われるに至る社会的背景が浮かび上ってきたともいえる。

教育機会の不平等要因については、知能遺伝説、経済的要因説、さらに教育に対する価値観の相違、家庭文化と学校文化との適応・不適応、学校のエデュケーションにおいて顕在化すると考える説などを提示したが、要因として取りあげながらも、その実態の解明については量的にも質的にもデータ不足によって不十分な分析となり、またアプローチの方法にも課題を残している。

階層間における社会的不平等の問題は解決が困難とされている。階層固定化説は論理の展開において教育機会不平等の現状肯定に通ずることは確かなことである。企業が21世紀の理想イメージとしてハンサムカンパニーの名をかけた、利益重視から人間性に富んだ内実を伴う新しい姿を目標に設定することによって、よりよい人材が学歴を問わず幅広く求められ、その結果、教育機会の不平等が構造的に是正されるに至らないとしても、深刻化しない状況はうみ出されるようになるかもしれない。

江戸時代における医師の拡がりについて

— 三河国宝飯郡を例に —

八八日六〇二〇 竹 政 寿 幸

本論では、江戸時代に於ける、地方への文化の拡がりの過程や実態といった重要な問題意識の基に、三河国宝飯地方をフィールドとし、その各村々や町に拡がる無名の在村医の存在を明らかにすることによって、文化の中でも取り分け、医学の地方への拡がりについて考察を試みた。

第一章ではまず、宝飯郡内各市町村史や諸史料・文献等を参考に、「宝飯郡医師一覧」を作製し、それを基に、具体的且つ個別的に各医師それぞれの経歴について述べた。各医師の経歴については、一人一人について墓所や子孫を調査し、そこから得られた事について報告する型をとったが、中には、百数十点もの医術書及び学術書（主に江戸中期から明治初期にかけてのもの）を所蔵する子孫もおられ、早速、文書整理をさせて頂き、文書目録を作製。経歴だけでなく、江戸期の医師が実際に修業したと思われる、医学上の流派及び専門の範囲の広さや、学問の種類の豊富さ等を垣間見ることができた。

つまり第一章は第二章以降で、江戸期の在村医に見られる、一般的傾向を考察して行く上での手掛かりとなるものである。次に第二章では、総論として、江戸時代の在村医の成立過程及び、在村医の拡がりという二つの側面から一般的傾向の考察を行った。

まず在村医の成立過程については、(一)在村医家の出自について、(二)在村医の修学過程について、以上二つの観点から考察した。在村医家の出自については、その財政的・経済的余裕と、社会的身分における役割の二つの理由から、村の有力役人層から医家に転じる場合が多かったのではないかと考えられる。次に在村医の修学過程については、専ら有名無名の先輩医の門で数年間、医学修行を行う事によって医師になり得たのであるが、その際、修学の時期によって、修学先やまたそれらを含めた修学過程全体の様子は異なっていたと思われる。

在村医の拡がりについてでは、(一)在村医増加時期とその理

由、(二)在村医の拡がり、以上二つの観点から考察を行ったが、宝飯郡の場合、一七九〇年代後半以降(一八世紀末頃から、医師の絶対数が増加しているように思われる。この時期が、古医方流医学の完成に当たる事から、在村医の増加には古医方が大きな影響を及ぼしていたと思われる。つまりそういった古医方等の有名塾(例えば吉益塾といったような)で学んだ医師が、修学を終えて村々に帰り拡がることによって、京都・大坂・江戸といったような、学術的レベルの高い地へ行かずとも、近郷で十分に医学修行を行える状態が各地方に出来上がる訳で、これこそが在村医の増加を可能にさせた大きな要因の一つではないかと考えられる。また在村医の拡がりについては、家業世襲制社会の江戸時代において、医家が医家であり続けようとする動きと、それに対応するように、長子単独相続による次男・三男の他家への養子入りや、分家による独立が、在村医の拡がりを可能にさせていたのであろうと考えられる。そしてそれらは、村や町を越えた、地方に於けるあらゆる文化的分野での交流の広さや深まりがあつて初めて、可能となつたのであろう。

最後に結びにかえてでは、明治以降、地方知識人として医師の担った、医学以外での役割が、文化的・学術的な物に留まらず、文化や経済あらゆる物を含めた、社会的側面からの地方に於ける底上げに大きく寄与していった事について、医師でありながら政治家的活動を行った数名の医師の事例によ

って述べた。

無名の医師についての研究の為、かなり骨が折れたが、調査の中で多くの人々に出逢えた事は、大変有意義で想い出深い物になったと一人満足している次第である。

近江国における在地領主の一樣相

鎌倉・南北朝期の朽木氏を中心として――

八八六〇二三 西 島 太 郎

日本中世において、近江国高嶋郡朽木庄に盤踞した在地領主朽木氏についての研究は、同地の朽木家に伝来した『朽木文書』（約一二三〇〇通）の分析を通じ、数多くある。しかし、鎌倉・南北朝時代の朽木氏については論考も少なく、概轄的に見るものと、朽木氏歴代の人物を見る論考のみで、その研究は深められていない。

本稿は、先学により明らかにされた、鎌倉・南北朝時代の在地領主朽木氏の性格を、朽木氏の個別所領の検討という観点から論じ、再検討したものである。

本稿は、三章と補論より成る。

第一章では、『朽木文書』の内、鎌倉・南北朝時代のもので、比較的多く残存した所領関係の文書を使用して、朽木氏所領の形成と崩壊過程を、個別所領の相伝関係の検討を通じ、概観した。

佐々木信綱が、承久の乱の勲功の賞として近江国高嶋郡朽木庄を、幕府より拝領して以来、朽木庄を本貫地とした佐々

木氏支流朽木氏は、一時、十ヶ所にまで増加した所領も、十五世紀初頭（永享三年〔一四三二〕）には、本貫地朽木庄のみ知行しうる状態であった。

第二章では、朽木氏の所領の形成と崩壊時に引き起こされた相論に着目し、朽木氏の所領獲得・維持・経営の方法等が、いかにして行われたのか、その一端を検討した。

特に、朽木庄と隣地葛川との相論では、朽木氏散在所領の不知行化が進行する中で、康応から応永期（一三八九―一四二八）、朽木氏は、所領押領という形ではあるが、本領朽木庄周辺への積極的な土地支配拡張政策をとっていた事が窺えた。

第三章では、同『朽木文書』の内、南北朝・室町時代に多く残存する政治的文書を使用して、朽木氏所領の形成・崩壊時に、朽木氏はいかなる政治動向をとったのか、南北朝の動乱を、朽木氏は京都に近い近江国高嶋郡朽木庄にあって、いかにして乗り切ったのかを検討した。

検討の結果、次に挙げる二つの事実が認められた。

第一に、十四世紀中・後期（特に、正平七年から康暦元年〔三三五―一七九〕まで）には、朽木氏惣領氏綱よりも、庶兄氏秀の方が、軍事力や將軍家への接近度が大きかったと考えられ、惣領氏綱は、この庶兄氏秀の軍事力をもって、所領回復を果たそうとしたこと。

第二に、朽木氏は全体として、室町幕府へ接近する姿勢をとっており、幕府の權威をもつて、所領回復をねらったと考えられること等である。

しかし、これら朽木氏の諸策も功を奏せず、永享三年（一四三二）には、本領朽木庄のみ知行しうる状態であった。

補論では、南北朝初期の朽木氏惣領、義氏と経氏とが同一人物であるとする、朽木義氏と経氏の同一人説を、再検討した。

その結果、朽木義氏と経氏とが同一人物であるとするには、多くの疑問が生じた。よつて、『寛政重修諸家譜』『朽木系譜』等が示す通り、朽木義氏・経氏は別人で、父子関係にあるとした。

永享三年（一四三二）以後、朽木氏は所領支配政策として、寛正から文明期（一四六〇―一八七）にかけて、朽木庄内、または近在の土地を、高利貸しにより買取していく。

本稿は、このような朽木氏の寛正―文明期の土地買取に至る経緯を跡付けたものとして、位置付けられるであろう。

奥三河における村落景観の特徴とその変化

八八日六二一六 田 中 秀 明

本論は、愛知県の奥三河地方に位置する東栄町と豊根村において、村落景観の特徴や変化の様子を景観写真を用いて分析し、景観変化のプロセスやメカニズムを明らかにすることを目的としている。

まず全体的な地形の様子や、各集落の地形・土地利用の特徴を見るために、地形図より断面図や標高別土地利用分布図を作成し、それらをもとに集落の広がり・土地利用も含めた標高差・土地利用の特徴などの指標を設定し、集落の類型を行なった。

次に景観の変化については、役場に保存されていた古い景観写真（大正末期から昭和40年代までの間で19ヶ所の写真を使用した）をもとに、現在の同地点をそれぞれ撮影し、古い写真との比較を行なった。そして変化した所については、いくつかのように変化したのかを現地での聞き取りを中心に調査した。なお聞き取り調査においては、景観を「耕作景観」「森林景観」「住居景観」「道路・河川他の景観」と区分し、それぞれの変化の年代や過程を表で示した。

また、その中の2つの写真および場所についてはさらに詳しく聞き取り調査などを行ない、その場所が移り変わっていた様子やその原因について考察した。

以上のことをまとめると、村落景観の年代別の変化過程については、昭和20年代から30年代にかけては広葉樹・畑・草刈場の減少とそれに伴う針葉樹の増加が大きな割合を占めており、昭和40年代になるとそれに加えて道路や河川の工事による田・畑・民家の減少も目立って見られるようになった。昭和50年代から現在に至るまでになると針葉樹の増加はあまり見られなくなるが、田や畑があれ地化したり工場や商店が立地している所がいくつか見られるようになることがわかった。

そして変化の空間的流れは、針葉樹が山の麓つまり集落へと徐々に近づき、道路や河川による変化がそれに続く二次的なものとして周辺へ変化を引き起こしたと言える。

これらの変化がなぜ起こったのか景観変化の要因について考えてみると、山間においてあまり利益が見込まれない畑な

どに比べ、スギ・ヒノキなどの針葉樹は高い金額で売れ、しかも手間がかからないことがあげられる。このほか、人口減少・村の高齢化が進んだことによる影響など、ほとんどの変化は人工的な要因によると言える。

しかし、景観の変化はその土地の変化全体ではなく可視的な変化であり、同じような変化をしている所でも、集落の広がりや土地の起伏など地形によって目でとらえる情報が多くなったり少なくなったりし、かなり違った変化に見えることがある。それから言えば、変化の要因として地形の様子など自然的要因も関係していると考えられる。

写真を用いた景観変化の研究は、違ったタイプの写真の処理の仕方などまだまだ様々な問題点があるが、空間的な流れや狭い地域単位（集落↓部落↓家の周辺）の変化を見るには写真は重要な手掛りとなる。また、屋根の種類や稲掛け・小屋など統計では決して表われないものが見れ、新しい地域の変化や地域像を導き出すこともできると思う。

森鷗外論

——鷗外と時代

八八七〇〇四 今 津 昌 子

「時代」というものは、それを共有したあらゆる人々を巻き込んで、流れ来たり、また流れ去ってゆくものであり、何人たりともその影響を受けずには済まされない。その意味において、大政奉還、開国という大事件によって幕開けされた明治という時代は、その波の高さ、幅において、前代未聞とも言ふべき影響力を持っていたと言えるだろう。

森鷗外・林太郎（一八六二—一九二二）は、この激動の時代、明治に生きた人である。

「時代」の流れの中にあつて、人はどのように翻弄されていたのか、あるいは自らの足場に立ち続けていられたのか——それは、以前から私が興味を持ち続けていたことだった。そこで、今回の論文では、鷗外におけるナシヨナリズムとロイヤリティーに注目して考察を試みた。

日露戦争に際し、開戦初期鷗外は、古いものに屈服したわけでも、それと和解したわけでもなく、一種の「平等主義」から戦意を鼓舞するような詩を書いている。当時は、列強の

アジア侵入が盛んであり、日本においてはいわゆる「三国干渉」があつて、「臥薪嘗胆」の世論が高まつていた。又、西洋には、黄禍論など、有色人種蔑視の考え方もあり、これらに対する反発、危惧が、鷗外にそのような詩を書かせたとと言えるだろう。この根本には、自国の自立、独立への思いがあつたと言つてよく、ここに鷗外のナシヨナリズムの一面をうかがうことができる。

しかし、一方で鷗外は、戦争そのものの持つ歪みを感じとつてゆき、「コスモポリイト」（世界市民主義者）の視点を持つようになる。

この視点から、敵であるロシア兵にもまた、「おなじ涙」が注がれる。

さらに、激戦地南山では、「誰かいふ 萬骨枯れて 功成ると／侯伯は よしや富貴に老いんとも」（「唇の血」と読んで、多くの兵の死の上に成立する「將帥」の功、「侯伯」の富貴への懷疑が示される。

しかし、いずれも鷗外は、そこから一步をふみ出すことをしない。鷗外がここで立ち止まってしまったのは、「挫折」や「諦念」からではない。そこには、鷗外自身の主体的な選択があったのである。

当時、日本は「天皇制」によって、何とかまとまりを保ちながら、天皇以外ならどんな有力者にでも成れるという社会的流動性を持っていた。但しこれは、「上」の出先になるという条件においてのみ有効なものだった。典医の家柄に生まれ、「立身出世主義」の氣風の強い家庭の家長として育った鷗外が、この装置の止まる事を怖れたとしても無理はない。さらに、鷗外が高等教育によって、日本をまとめる上での、このような「制度」の必要性を認めていたとしたら、彼がその足場から離れようとしなかったことも納得できるだろう。

一方、鷗外は「阿部一族」等を通して、日本人特有の死のかたちを描き出し、その個人的理由が、政治・権力によって、勝手に都合よく「忠誠」や「反逆」として、「時代」の内部に組み込まれてしまう事に反発した。そして、鷗外にとつてのロイヤリティーも、結局は、「権威」に対する「個人的」な思い入れを欠いたところでは、「日本」をまとめる上での「制度」としてしか存在しなかったと言つてよいだろう。

また、明治初期を舞台とした「堺事件」においては、朝廷も藩をもひくくめた「権威」というものの不明確さが描かれている。このような不明確な「権威」への忠誠を要求され

ている、という点においては、明治初期も「堺事件」の書かれた大正初期も同じであり、その裏切りに「堺事件」が結論づけられている、ということの内に、鷗外の「権威」というものの不信が表明されていると言えるだろう。

紡ぎ女たちの悲鳴

——グリム民話にみる

六二七四八〇五 小 川 美根子

グリムの民話は、世界中の童心を魅了する泉として流布している。その二〇〇話以上に上る民話において、一群の糸を紡ぐ女性たちが存在する。勤勉な者もいれば、怠惰な者も、器用な者もいればそうでない者もあり、種々雑多である。

ところで、彼女たちはなぜ糸紡ぎをしているのか。それは、これらの民話をグリム兄弟に語って聞かせたのが、紡ぎ女たちだからに相違なく、故にそれらの民話には彼女たちの本音が凝縮されていると推測したのである。私は本論文を執筆するに当たって、糸紡ぎの話を詳しく分析することによって、紡ぎ女たちの心情に迫ることに焦点を置いて書き進んだ。

糸紡ぎとは、繊維に撚りをかけて糸を作る作業のことである。グリムの民話の時代には、着る物を縫う為には、まず一本の糸から作らなければ始まらないというような、生活に不可欠な、基本的かつ根元的な作業だったといえる。かつては糸紡ぎの労働は女性の生活の重要な部分であり、糸を紡ぐ女性性は、ゲーテの「ファウスト」や、ワーグナーの「さまよえ

るオランダ人」などの種々のドイツ文学に登場し、糸紡ぎが女性を比喩する程、ドイツの民衆に浸透した労働だったのである。

古来より女性が糸を紡ぐ技術は非常に尊ばれ、それは、一運命の糸を紡ぐことから、「人間と運命」に結び付けられてきた活動である。従って運命の女神は、同時に紡ぎ女でもある。グリムの民話での、その代表格が、ホレのおばさんである。彼女は不精な紡ぎ女を厳しく懲らしめ、反対に質実な娘には、幸運を授ける。私には、「いばら姫」に悪い運命を紡ぎ出した十三人目の予言者は、立腹した際のホレおばさんのように思われる。またグリムの民話における他の運命の女神たちも、みなホレおばさんに似通っており、彼女がゲルマン信仰の中に何世紀も生きている女神であるという事実も合わせ、彼女の存在の大きさを認識するに至った。

ところで、怠け者の娘が報いられ、生涯糸紡ぎの労働から解放される「糸くり三人女」の話は、当時非常に好んで語ら

れたものと思われる。なぜなら、糸紡ぎからの解放——これこそが、紡ぎ女たちの最大の念願であり、夢だったからである。しかし現実には決して叶わない望みであるが故に、彼女らは、それを民話に昇華させ語り合ったのである。「糸くり三人女」は、彼女らの切願が結実したものである。

グリムの民話における様々な糸紡ぎの話は、両義的な位置付けをすることが可能である。つまり、実直に仕事をする娘には祝福と成功が齎され、糸紡ぎの能力それだけで何にも勝る至宝になるものと、逆に、女性にとつての身の拘束や、肉体への峻烈な負担を表すものの両面が存在するのである。そして前者のような例は稀であり、後者の例が多いのは判然とした事実である。肉体への重荷といえは、「糸くり三人女」の三人のお婆の醜い外見が、糸紡ぎの耐え難い仕事の性質を、その外面に具象化することによって如実に物語っている。またその労働は、ある時は懲罰として科される苛酷なものであり、また娘たちは仕事を与えられた途端に、成す術もなく途方にくれ絶望して泣き出す程の労働なのである。彼女たちからは、嘆きや不満の声、そして悲鳴ばかりが聞こえてくるような気がする。

糸紡ぎの仕事の最終的な成果によつて女性たちは、幸福への切符を手に入れることができる。もし彼女らが自分の仕事を、誰かに代行してもらつていたとしても。なぜなら、そのようにして仕事を免れることが、これらの民話の伝承者たち

の願いだつたのだから。そして、糸紡ぎの仕事は、醜貌を生み、間違いなく女性たちに疎まれていたものなのだ。これらのことが、何世紀にも渡つて、糸紡ぎの仕事に苦しんできた女性たちの肉声なのであり、グリムの民話におけるそれらの話を讀むたびに、我々に迫ってくる彼女たちの哀訴なのである。